

第六話<ハリウッドスターとの一時>

約40日間の日程を終えて、前の職場の先輩のところへ報告に行くと、その先輩から驚くべき事実を聞かされました。なんと…その作品にアメリカの有名なハリウッドスターが出演しており、わたしはその俳優さんが作品中で身につけていたベストを（わたしがあまり褒めるもので、その方は出演シーンを全て撮り終えると、『リトルモンスターに』…そう言ったかどうかは定かではないが…プレゼントしてくれ、とって衣装担当のエリザベスさんに預けて）頂いていたのです。まさかそんなに有名な人だったとは… サイン一つ貰っていませんでした。「おまえ、ホンと馬鹿だな！日本人で共演できた奴なんて、たぶんおまえが初めてだったろうに！」「え～～？！」……

たぶんそんな会話で盛り上がったのですが、しかしその時まで、ハリウッドスターとの一番の思い出とは「瀬崎…ジャック・パランスに紹介するから来いよ」とってプロデューサーと監督に連れられて行ったバミューダーのディスコで紹介して頂いた、厳つい感じだが優しい笑みを湛えた大男に「オオー、リトルモンスター！（ちなみにわたしの身長は180cmですが）」とってそのぶ厚い大きな手のひらで優しく握手して一緒に踊ってくれた…そのことよりも、助演のフランスの女優セリーヌと踊った一時が圧巻過ぎて…おまけに本当に馬鹿なわたしは、その後ジャックの着ていたベストを、衣装担当のエリザベスさんを通じてプレゼントして貰ったあのベストを無くしてしまったのです。ああーその人こそ、かの”シェーン”の悪役を演じたその人だったのです。

わたしはその後暫くたって上映された”バグダッド・カフェ”を食い入るように見ました。そこには、画家ジャック・パランスがあのかのときのように優しいオーラを発していました。

この、日本で幻となった”^{アイボリーエイプ}THE IVORY APE”の台本では、最初 Jack Palance 扮する狩猟家マーク・カザリアンが、わたしの扮する白いゴリラを撃ち殺す役になっていたのですが、急遽それも撮影に入ってからだったと思うのですが、ジャックの要望で？、それは、逆に止める役になりました。それをどう受け取るかは人それぞれだと思いますが、それが本当のジャック・パランスという、あのかの時からわたしの掌^{てのひら}に残っている、大きくてごつくて優しい暖かな掌の感触の持ち主の、人柄そのものなのだと思います。